

「理学療法学生・作業療法学生の職業イメージとモチベーションに関する研究」第1報

—イメージの明確さとモチベーションの学年間比較—

和田佐和子 久保日向 糸井睦絵 上村さと美 武井圭一

Comparisons among grade levels of PT (Physical Therapy) and OT (Occupational Therapy) students at Health Science University

— Students images of their future jobs
and their motivation to be professionals —

Sawako Wada, Hinata Kubo, Mutsue Itoi,
Satomi Kamimura, Keiichi Takei

Abstract

This paper has two purposes: 1) to examine students' images of their future jobs as physical therapists and occupational therapists and; 2) to examine their motivation to be professionals. Subjects of this research are physical therapy students (PTS) and occupational therapy students (OTS) at Health Science University (HSU).

A questionnaire was given to all PT and OT students at HSU (n=574). Valid response rates were 91 % (n=521).

The questionnaire includes 8 visual analog scales, 4 open-ended questions, and 9 multiple questions. The visual analog scale and open-ended questions were designed to gain information about how students envision their future work and their motivation to do the job. Analysis of Variance (ANOVA) was used for the data analysis, comparing different grade levels,

Findings are as following: the actuality of being physical therapist among PT students become more clear ($P < .005$) at the junior year. The images of occupational therapists among OT students become more clear ($p < .005$) at the sophomore and junior year.

In terms of their motivation for being physical and occupational therapists, there were no significant differences either between PT and OT students or among different grade levels. It was found that levels of motivation are consistently high throughout all grade levels.

Key Words: image , motivation, physical therapy student, occupational therapy student

はじめに

保健医療職（コ・メディカル）としてリハビリテーション専門職を目指す学生は増えている。開学して間もない本学も理学療法学科と作業療法学科があり、受験者数も多く人気がある。しかし、大学で学ぶ4年間は、思っている以上にハードで厳しい。1年次より一般的な科目あるいは専門的な科目授業が多く、知識も技術も多くを要求される。学外で行う臨床実習は、知識や技術に加えて社会性も要求されるため、学生にとって大きな通過点である。それらのハードな学生生活に適応するためのひとつの提案として、学習意欲を高めること、すなわち理学療法士や作業療法士になりたいというモチベーションを高く維持することが望ましいと考える。そのためには、なるべく早期より個々の学生に理学療法士、あるいは作業療法士という職業に対するイメージが構築されているほうがよいのではないかと推察される。

職業イメージに関する先行研究には、白井ら¹⁾による看護学科、医学科、社会福祉学科に所属する学生の職業イメージに関する調査や、平元ら²⁾による看護職のイメージに関する調査がある。これらより、看護師や医師などは身近なモデルが多いことや自らの受診体験を通して職業イメージが描きやすいことに対し、ソーシャルワーカー像にはばらつきが見られたこと¹⁾や、家族に看護職者を有することは看護職のイメージに大きく影響はしなかった²⁾という報告がされている。

モチベーションに関する先行研究には、郷ら³⁾による理学療法学生（以下、PTS）のモチベーションに関する調査や、永嶋⁵⁾や加地⁵⁾による看護学生の学習意欲に関する調査がある。これらより、PTSは入学年度に理学療法士になりたいというモチベーションが最も高いが、その後低下傾向がみられたこと³⁾や、大学生・短大生・専門学校生の看護学生の学習意欲を比較すると「学習態度」では短大生が、「将来に対する展望」では専門学校生がそれぞれ高い学習意欲を示した⁴⁾という報告がされている。また、臨地（臨床）実習前の事前学習への意欲に影響を及ぼす要因として、興味・関心の強さや学習環境が意欲に影響を及ぼすと学生が認識している⁵⁾という報告がされている。

しかしながら、職業に対するイメージがどの程度明確であるかを調べたり、イメージとモチベーションの関係を調べたり、さらに学科間や学年間でそれらを比較した報告はほとんどみられない。そこで、職業に対するイメージやモチベーションの傾向を把握するための調査研究を行い、教育や教育を行う環境の構築に役立てようと考えた。

「職業イメージとモチベーションに関する研究」の第1報である本稿は、在学中のPTSと作業療法学生（以下、OTS）のもつ、理学療法士や作業療法士に対する職業イメージの明確さやモチベーションの程度の把握を目的とする。また、実際に学生がどのような職業イメージを抱いているのかを明らかにし、学科間や学年間での差異について考察を加える。

方 法

1. 対象者

調査対象は本学のPTSとOTS全員とし、以下のように対象（標本）を区分した。

- ・ 2005年度のPTSの1年次生（以下、1PTS）
- ・ 2005年度のPTSの2年次生（以下、2PTS）
- ・ 2005年度のPTSの3年次生（以下、3PTS）
- ・ 2005年度のOTSの1年次生（以下、1OTS）
- ・ 2005年度のOTSの2年次生（以下、2OTS）
- ・ 2005年度のOTSの3年次生（以下、3OTS）

2. 調査の実施方法

調査は、調査対象者を一度に集めて行う集合調査法を用いて行った。調査の時期は、前期授業開始より第2週目とした。第2週目を選択した理由は、混乱が多い授業開始直後の第1週目を省いたことによる。また、調査の実施は1PTSから3OTSまで、全員が履修する授業の中で科目担当教員の協力のもとに行った。これらは、無効となるデータをできるかぎり少なくするために配慮した点である。なお、調査の実施は事前に作成した調査マニュアル“調査実施の手引き”を参考にし、研究員が分担して行った。

3. 調査項目

本研究にて使用した調査票を表1に示す。調査票の設問の形式は、VAS（visual analog scale）を応用した閉鎖回答方式と自由回答方式の折衷とした。質問文の作成の際には、予備調査として他大学の医療系学生を対象に質問文の内容を検討するための模擬調査を実施した。

主要な調査項目は以下の通りである。「理学療法士に対するイメージがはっきりしていると思う」「作業療法士に対するイメージがはっきりしていると思う」「医師に対するイメージがはっきりしていると思う」「看護師に対するイメージがはっきりしていると思う」「理学療法士になりたい」「作業療法士になりたい」「医師になりたい」「看護師になりたい」の8項目とした。これらは、医療系職業に焦点を絞って各職業のイメージやモチベーションを訊ねて比較する意図をもつ。その他の項目は、「年齢」「性別」「学科」「学年」など学生の属性を訊ねる4項目と、「自分や家族・親戚がリハビリを受けたことがあるか」「家族・親戚で医療福祉関係の仕事をしている人はいるか」「医療・福祉関係のボランティアの経験があるか」「受験の際、医療・福祉系の他学科を併願したか」「趣味やクラブ活動などでのスポーツ経験はあるか」という社会的背景を訊ねる5項目とした。

本報告（第1報）では理学療法士や作業療法士に対するイメージやモチベーションに関する項目を中心に結果を整理した。

表1 調査票

理学療法学生・作業療法学生の職業イメージとモチベーションに関するアンケート

アンケートにご協力いただきありがとうございます。
 質問は8つあります。答え方は、例を参考にして線を書き入れてください。
 なお、質問1)から4)については、右側に自由記載欄がありますので、
 そちらも記入してください。

少しは不便だろうけど、
 案外大丈夫かも・・・

例) 携帯電話がない生活は不便であると思う

思わない

|

|

思う

1) 理学療法士に対するイメージがはっきりしていると思う		自由記載;理学療法士に対するあなたのイメージ
2) 作業療法士に対するイメージがはっきりしていると思う		自由記載;作業療法士に対するあなたのイメージ
3) 医師に対するイメージがはっきりしていると思う		自由記載;医師に対するあなたのイメージ
4) 看護師に対するイメージがはっきりしていると思う		自由記載;看護師に対するあなたのイメージ
5) 理学療法士になりたい		
6) 作業療法士になりたい		
7) 医師になりたい		
8) 看護師になりたい		

年齢;	歳	性別;	男・女	学科;	PT・OT	学年;	1・2・3
自分や家族・親戚がリハビリを受けたことがありますか?				なし・あり			
家族・親戚で医療・福祉関係の仕事をしている人はいますか?				いない・いる			
医療・福祉関係のボランティアをした経験がありますか?				なし・あり			
受験の際、医療・福祉系の他学科を併願しましたか?				しない・した			
趣味やクラブ活動などでのスポーツの経験はありますか?				なし・あり			

4. 分析方法

調査票を回収し、無効データを取り除いた（データ・クリーニング）後に、以下1)～6)のような分析手続きを行った。1) 測定の信頼性を調べるため、1データにつき外部の評価者2名が質問1から8を指定の定規（KOKUYO;CL-RG30）を用いて測定、数値化し、コンピューターに入力する。2) 属性等を表す定性的な変数もコーディングしてコンピューターに入力する。3) 検者間信頼性（ICC）を算出し測定の信頼性を確認する。4) 各項目の基本統計量として平均値を算出し、学科ごと、学年ごとに比較検討する。5) 職業イメージとモチベーションについて学年間の有意差検定を行う。6) 学生のもつ職業イメージの内容について調査票の自由記載欄より整理する。

全てのデータの分析は“統計解析ソフトSPSS 13.0j”を用いて行った。有意差の検定には一元配置分散分析を用いた。有意水準は5%とした。

5. 倫理上の手続き

本研究は本学の定める研究倫理要綱に従い行った。対象者や集合調査法という調査状況より以下の倫理的配慮を行った。協力依頼文書の配布や同意書への署名は求めない代わりに、調査実施時に口頭による十分な説明を行い、調査用紙の返却をもって参加同意が得られたとみなした。匿名性を保証し、回収後の調査票の管理にも配慮した。

結 果

1. 調査対象学生数と有効データ率

本研究における調査対象学生数と有効データ率について各学科の学年ごとに表2にまとめた。調査対象学生574人のうち、有効データ数は521人であった。有効データにおける男女比率は282：238で男性がやや多かった。全有効データ率の平均は91%であった。全有効データの平均年齢は19.7歳であり、現役の大学生が多かった。

表2 調査対象の内訳

	調査対象 学生数	有効データ数 〔男:女〕	有効データ率 (%)	有効データの 平均年齢(歳)
1PTS	90	79 〔47:32〕	88	18.6
2PTS	96	90 〔62:28〕	94	19.9
3PTS	101	93 〔57:36〕	92	20.5
1OTS	98	91 〔37:54〕	93	18.4
2OTS	94	81 〔42:39〕	86	20.3
3OTS	95	87 〔37:49:不明1〕	92	20.6
全 体	574	521 〔282:238〕	(平均 91)	(平均 19.7)

2. 学生の社会的背景

有効データとなった521人の学生の社会的背景を学科ごとに表3にまとめた。リハビリ受診の経験や身近な人に医療・福祉関係者がいるかなどリハビリテーションに興味をもつきっかけになると予測される項目ではPTS、OTSともに半数以上が「あり」と答えた。受験時に複数の学科に興味をもっていたか調べる項目ではPTSがやや併願率が少なく理学療法学科への単願傾向がみられた。作業療法学科も40.9%の併願率であった。また、PTS、OTSともに9割以上の学生がスポーツ経験が「あり」と答えた。

表3 PTSとOTSの社会的背景

		総数(人)	あり(人)	あり(%)
自分や家族・親戚がリハビリを受けたことがありますか?	PTS	264	187	70.8
	OTS	259	155	59.8
家族・親戚で医療・福祉関係の仕事をしている人はいますか?	PTS	264	135	51.1
	OTS	259	155	59.8
医療・福祉関係のボランティアをした経験がありますか?	PTS	264	156	59.1
	OTS	259	149	57.5
受験の際、医療・福祉系の他学科を併願しましたか?	PTS	264	76	28.8
	OTS	259	106	40.9
趣味やクラブ活動などでのスポーツの経験はありますか?	PTS	264	252	95.5
	OTS	259	237	91.5

3. 検者間信頼性

外部評価者2名による測定の信頼性をみるために、級内相関係数を学年ごと、質問ごとに算出したところ、結果は全て0.95以上の高い相関がみとめられた。そのため、2名のデータの平均値を本研究における代表値として採用した。

4. 理学療法士に対するイメージの「明確度」

PTSがもつ理学療法士に対するイメージの「明確度」を学年ごとに示す(図1)。図1では、便宜上得られたデータを以下のように3つに分けた。①明確度70.0%–100%、②明確度30.0%–69.9%、③明確度0%–29.9%。結果より、1PTSと2PTSは②の割合が55.7%、47.8%と最も高かった。3PTSは①の割合が76.3%と最も高かった。

また「明確度」を学年間比較したものを図2に示す。図の縦軸は学年ごとの「明確度」の平均値(単位はミリ)を表す。結果より、1PTSと3PTS間、2PTSと3PTS間に5%水準の有意差がみられ、3PTSにて理学療法士に対するイメ

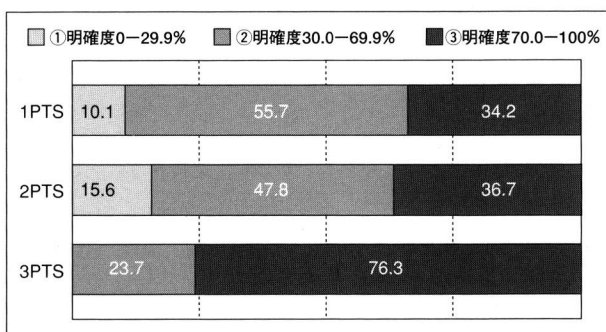


図1 理学療法士に対するイメージの「明確度」

ージの明確さが有意に増加した。

5. 作業療法士に対するイメージの「明確度」

OTSがもつ作業療法士に対するイメージの「明確度」を学年ごとに示す(図3)。図1と同様に、得られたデータを①明確度70.0% - 100%、②明確度30.0% - 69.9%、③明確度0% - 29.9%の3つに分けた。結果より、1OTSは②の割合が59.3%と最も高かった。2OTSと3OTSは①の割合が48.1%、59.8%と最も高かった。

また「明確度」を学年間比較したものを図4に示す。図の縦軸は学年ごとの「明確度」の平均値(単位はミリ)を表す。結果より、1OTSと2OTS間、1OTSと3OTS間に5%水準の有意差がみられ、2OTSにて作業療法士に対するイメージの明確さが有意に増加した。

6. 理学療法士に「なりたい度」

理学療法士になりたいというモチベーションの程度を「なりたい度」として学年ごとに示す(図5)。図5では、便宜上得られたデータを以下のように3つに分けた。④なりたい度70.0% - 100%、⑤なりたい度30.0% - 69.9%、⑥なりたい度0% - 29.9%。結果より、1PTS、2PTS、3PTS全てにおいて④の割合が97.5%、88.9%、94.6%と高い値をしめした。有意差は認めないものの、2年次で一度低下を示し、3年次で再び増加する傾向がみられた。

7. 作業療法士に「なりたい度」

作業療法士になりたいというモチベーションの程度を学年ごとに示す(図6)。図5と同様に、

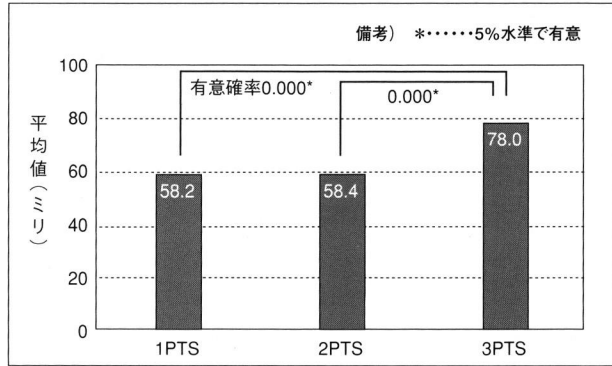


図2 「明瞭度」の平均値の学年間比較 (理学療法士)

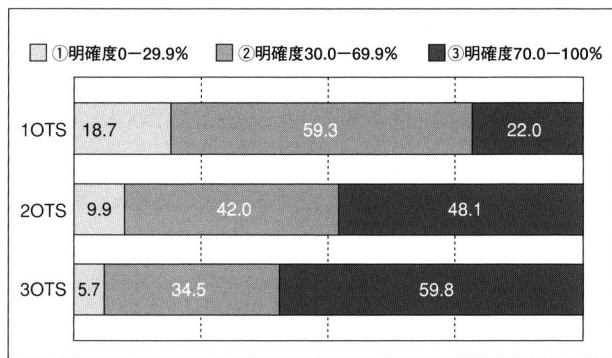


図3 作業療法士に対するイメージの「明瞭度」

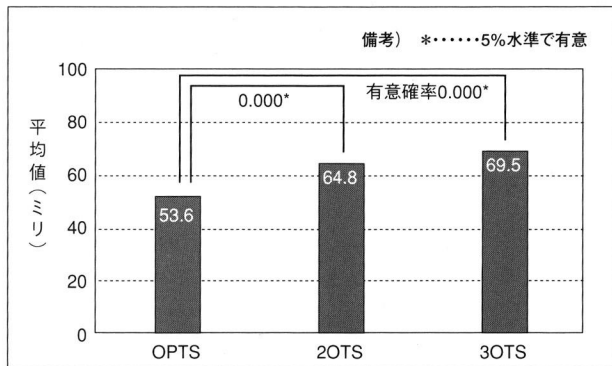


図4 「明瞭度」の平均値の学年間比較 (作業療法士)

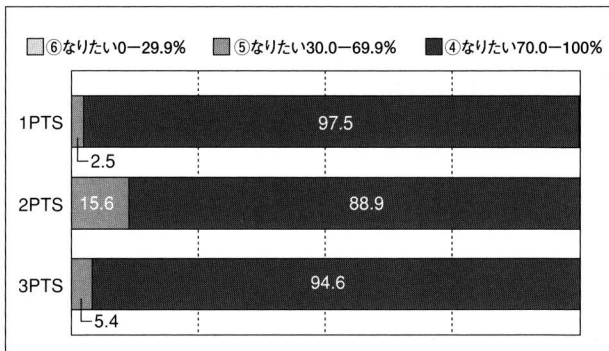


図5 理学療法士に「なりたい度」

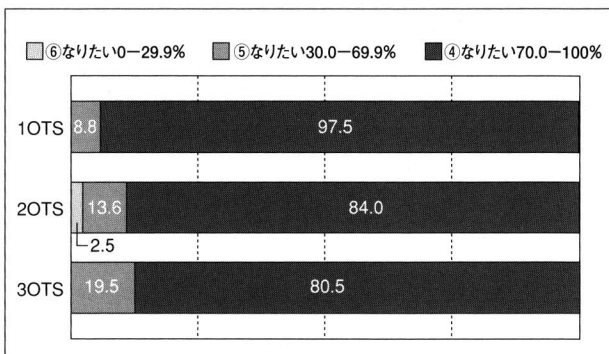


図6 作業療法士に「なりたい度」

確度③」、横軸は学年ごとに分けて結果を整理した。PTS、OTSともに「明確度」の区分によらず、さまざまな職業イメージを持っていた。

考 察

1. PTS、OTSの社会的背景の傾向

「自分や家族・親戚がリハビリを受けた」「家族・親戚で医療・福祉関係の仕事をしている人がいる」「医療・福祉関係のボランティアをした経験がある」などの結果より、少なくとも半数以上のPTS及びOTSにリハビリテーションに興味をもつきっかけが身近にあったことが示唆される。看護師や医師などは自らの受診体験や身近なモデルが多いため職業イメージを描きやすいという白井らの先行研究¹⁾を参考にすると、リハビリテーション専門職である理学療法士や作業療法士も徐々に社会の中で知名度を上げてきた職種ではないかと推察される。知名度を上げた主な要因は、有資格者の増加であると考えられる。2005年度の有国家資格者は理学療法士が約36000人、作業療法士が約30000人である。10年前(PT約14000人、OT 7708人)と比較すると格段に多い。有資格者が増加して知名度が上がり、リハビリテーションに興味をもつ人が自然と増えたことが予想される。本学も学科定員が80名であり、毎年多くの理学療法士、作業療法士を社会に送り出す役割を担っている。それゆえ好循環が維持されるよう質を確保する努力が絶えず必要であると思われる。

また、「他学科を併願したか」に対してPTS、OTSともに半数以下の数値を示したが、本学

得られたデータを④なりたい度70.0% - 100%、⑤なりたい度30.0% - 69.9%、⑥なりたい度0% - 29.9%の3つに分けた。結果より、1OTS、2OTS、3OTS全てにおいて④の割合が91.2%、84.0%、80.5%と高い水準でモチベーションが維持されていた。有意差は認められないが、学年ごとに低下の傾向を示した。

8. 学生のもつ職業イメージの具体的内容

PTSのもつ理学療法士に対するイメージの内容を表4に、OTSのもつ作業療法士という職業に対するイメージの内容を表5に示す。表4、5ともに、縦軸は「明確度①」「明確度②」「明

では推薦入学者の割合が多いため、この結果だけでは併願者の割合が多いかどうかを言及することは難しい。研究を進める上での必要性を検討し、今後の課題としたい。

2. PTS、OTSの理学療法士・作業療法士に対するイメージの傾向（明確さと内容）

PTSの理学療法士に対するイメージ及びOTSの作業療法士に対するイメージは、入学して間もない1年次生よりある程度明確に持っていた。特に、作業療法士を目指す学生の多くは実は何をする専門職かよく分からないまま入学してくるのではないかという印象を筆者らは持っていたため予想外の結果といえる。これは、上記のようにリハビリの仕事が身近な存在になったことに加えて、情報量の多い時代背景の影響であると考えられる。今日では書籍やインターネットなどから興味のある事柄を迅速に調べることが可能である。そのため、調べようとする意欲さえあれば理学療法士や作業療法士に関する情報が簡単に入手できる。これらより、自己流でありながらも入学するまでに自分なりの職業イメージを持っていたのではないと思われる。

次に、イメージの明確さと本学カリキュラムとの関連性について考察を加える。今回は、特にイメージの形成に大きな影響を与えると予測された臨床実習に焦点をしばって考察した。PTSの理学療法士に対するイメージの明確さは、3年次生が2年次生と比較して有意に増加した。理学療法学科の臨床実習をみても、1年次から2年次前期にかけて見学実習（1日間）は行いが、理学療法対象者（患者）に対しての理学療法を間近に体験し実践する機会は殆どない。しかし、2年次後期の検査実習（1日間）では、学生がセラピストの卵として初めて対象者に向き合うという貴重な体験をする。したがって、学生が主体的に対象者に関わるという体験がイメージの増加に大きく影響していると思われる。OTSの作業療法士に対するイメージの明確さは、2年次生が1年次生と比較して有意に増加した。また、図3では明確度の③が学年ごとに徐々に増加した。作業療法学科の臨床実習をみても、1年次から2年次にかけて施設見学3箇所、1日実習3箇所、3日実習1箇所を体験し、身体障害・精神障害・発達障害・老年期障害領域すべてを自分の目で確かめることができる。2年次から3年次にかけては、身体障害領域と精神障害領域の1週間実習を2箇所経験する。理学療法学科と比較すると早期より対象者と接する機会が多いといえる。早くから現場を体験することが作業療法士に対するイメージ形成の一助となっているものと思われる。

また、表4、表5に示したように具体的にどのような職業イメージであるかを学年ごとにみると、PTSもOTSもイメージの明確度（①②③）に関わらず、具体的な記載から抽象的な記載まで幅広い回答がみられていた。学生はみな個性を持っており、イメージという抽象的な言葉に対する反応も千差万別であると考えられる。しかし、学年を重ねるにつれてイメージの内容はやや一定の方向に収束していく傾向にあると思われる。収束するのは学習がスムーズに進んでいることを示す可能性もあり、今後も調査を継続し検討が必要である。

3. PTS、OTSの理学療法士・作業療法士になりたいというモチベーションの傾向

PTSの理学療法士になりたいというモチベーションは1PTSから3PTSまで高く維持されていた。これは、郷ら³⁾の入学年度が高くその後低下傾向がみられたという調査報告とは異なる

る結果となった。また、OTSの作業療法士になりたいというモチベーションもPTSと同様に、IOTSから3OTSまで高いモチベーションが維持されていた。しかし、有意差はないが、PTSでは2年次にわずかにモチベーションが下がる傾向が見られ、OTSでも2年次、3年次と徐々にモチベーションが高い学生の割合が低下する傾向が見られた。この点について、PTSの場合はいわゆる“中だるみ”のような心理状態になるのではないかと推察される。もしくは1年次の高いモチベーションが入学時特有の過度な緊張状態の現れである可能性がある。OTSの場合は、1年次後期より臨床実習において4つの領域を体験することにより、多種多様な作業療法に触れることで、入学時に漠然と抱いていた職業イメージとのギャップが生じたことが推察される。また、2年次後期では1週間ずつ2領域（身体障害領域、精神障害領域）の学外実習を経験し、それぞれの領域での違いに戸惑いを感じ、「自分は作業療法士に向いているのだろうか、こんなこともあんなこともできるのだろうか」という不安状態が生じて混乱する学生が増えるのではないかと推察される。今回の結果では学年間に有意差はなかったが、今後も調査を継続しながら検討を重ねたい。

おわりに

本学の理学療法学科と作業療法学科の学生は、理学療法士及び作業療法士というリハビリテーションの国家資格を取得するため、1年次よりハードで厳しい学生生活を送っている。それらに適應するためには早期より職業イメージを構築しモチベーションを高く維持することが望ましいと考え、在学生の職業イメージやモチベーションの傾向を把握するための調査をした。その結果、学生のもつ職業イメージはある程度明確であることや、モチベーションが全ての学年で高く維持されていることがわかった。これらの傾向は今後も継続して調査を行い検討したい。さらに、職業イメージとモチベーションがどのように関係づけられるか相関検定などを通して検討し、より多角的な視点から分析することも、第2報以降の課題である。

最後に、調査に協力していただいた全ての方に深謝します。

文献

- 1) 白井瑞子、井関敦子、内藤直子：医療・福祉職をめざす大学生の職業イメージと背景要因の関連、香川医科大学看護学雑誌 第8巻第1号、27-35、2004
- 2) 平元泉、石井範子、平むつ子、他：学校種別にみた看護学生の看護に対するイメージについて(2)、秋田大学医短紀要7、123-130、1999
- 3) 郷貴大、有馬慶美、平林弦大、杉原敏道、小川恵一；理学療法学生の理学療法士志望度変化について、東北理学療法学、10、73-77、1998
- 4) 永嶋由理子；看護学生の学習意欲の比較検討－専門学校生・短期大学・大学の看護学生について－、山口県立大学看護学部紀要、6、37-39、2002
- 5) 加地幸子；臨地実習開始前の学習意欲に影響を及ぼす要因、神奈川県立看護教育大学看護教育研究集録、26、142-149、2001

表4.PTSがもつ理学療法士に対するイメージ

*調査票の自由記載欄を整理したもの

	1PTS	2PTS	3PTS
①イメージを比較的持っている (はつきり度 70-100%)	<ul style="list-style-type: none"> ・病気や怪我などで歩けなくなったり、手が動かなくなったりなど障害を持った人に運動や物理療法で治療をし、回復させる ・物理的な療法やマッサージなどのリハビリをして、医師の指示のもと身体の不自由な人にリハビリをする ・病気や怪我している人を支える ・患者さんと一緒になって運動に対するケアを行なう ・患者の精神面のケアをする事も大事で、その点は医師にすら劣らないと思う ・身体のリハビリをする人 ・人の再生能力を引き出す ・人の人生を支えること ・頼れる感じ ・リハの先生 ・大変そう 	<ul style="list-style-type: none"> ・寝る、立つ、起きるなどの基本動作の訓練 ・主に下肢(立ち上がり、歩行など)を中心に訓練をする人 ・立つ、歩くなどのリハビリをする ・大きな動作のリハビリを行なう ・リハビリテーション、マッサージをする人 ・リハビリの先生 ・機械やマッサージ等でリハビリを行なう ・患者さんと楽しい治療をしながら、患者さんのQOLの向上を手助けする ・地味だと思う ・カッコいい人 	<ul style="list-style-type: none"> ・基本的な身体動作、日常生活動作へのアプローチ ・歩行等の大きな動作に対するリハビリ ・運動療法や物理療法で活動制限をなくし良い社会生活を送れるようにする ・大がかりな道具も用いる ・その人の持っている能力を最大限に引き出す ・ケガをさせないための機能維持をめざす ・精神的な面でもサポートする ・リハビリのプロ ・体を使う仕事 ・知的、心強い、明るい、元気がつらつ、カッコいい ・必要とされる人
②イメージをある程度持っている (はつきり度 31-69%)	<ul style="list-style-type: none"> ・先天的あるいは後天的要因により、身体の機能が低下、損なわれた時、現状の維持、あるいは回復を目的とした物理運動療法を施す ・ケガや病気などで機能を失った人の機能回復を手助けする ・片麻痺の人を歩けるようにリハビリする ・歩くなどの大きな動作ができるよう治療 ・身体機能回復・改善 ・機械を使う ・患者の身体的な回復・サポートだけでなく精神的な部分も支援する ・患者さん自身の回復意欲を持たせる ・相手の気持ちをよく理解して共感できる ・リハビリをして、人を社会復帰させる人 ・人の支えになる仕事 ・根気強くまじめ ・リハビリの先生、リハビリセンター等で働く ・コミュニケーションをとるのが上手い 	<ul style="list-style-type: none"> ・運動療法、物理療法などによってリハビリを行なう ・平行棒などを使う ・機器を使う+徒手による治療 ・機能回復、残存機能維持、疾患予防を行なう人 ・スポーツ、小児、老人など色々な分野で仕事をしている ・まだ整形が主 ・病院でリハビリに関する仕事をしている、スポーツ部門のイメージはあまりない ・医師よりも患者さんに身近 ・お年寄りに対するリハビリが多い ・根気と体力が要りそう ・患者さんとの触れ合いが多い ・自分が目指している職業、学べるものがたくさんある職業 ・どこからどこまでがPTの仕事なのかいまいちわからない ・患者さんと仲がいい 	<ul style="list-style-type: none"> ・日常生活の基本的な動作を獲得させる ・体の機能を改善する ・よく分かっていない部分もある ・作業療法士に比べて一方通行な感じ
③イメージをあまり持っていない (はつきり度 0-29%)	<ul style="list-style-type: none"> ・物理的なリハビリ専門職 ・勉強が大変。人間と仕事をするので大変そうだけど、やりがいがありそう ・患者のリハビリをプランしたり、実行したりする人。他はあまりイメージがわからない 	<ul style="list-style-type: none"> ・医療的、医者と似ている ・機械を使う ・やさしい、明るい、やりがいがある ・あまり知られていない、緊急時に役に立たない ・まだ整理できていない 	

表5.OTSがもつ作業療法士に対するイメージの内容

*調査票の自由記載欄を整理したもの

	1OTS	2OTS	3OTS
①イメージを比較的持っている (はつきり度70-100%)	<ul style="list-style-type: none"> ・手先などのリハビリ ・身体だけでなく精神もケアする ・PT**に比べマイナーなイメージもあるが、作業療法の方が精神的なケアの重要性が高いと思うので、より大変な職種 	<ul style="list-style-type: none"> ・日常生活を支える ・社会復帰するために作業を通じて機能回復を行うこと ・あまり知られてない。身体より老人の領域が有名 ・明るい ・リハビリ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ADL*、応用動作訓練、主に上肢・リハビリや手指を使う ・ADL*の改善やその人にあったやり方を見つかり、患者の楽しみを作り出す ・生活全体に意識を向ける、社会生活をよりよくする、個人に深く関わる ・様々な活動通して社会復帰の手助けをする ・幅が広く、様々な障害の人に関われる ・心身共に働きかけ、プログラムの内容が広い ・手工芸、レクリエーション、趣味の開発 ・作業活動も行いながら、プログラムをたてる ・身体面と共に精神面を考えている、心のケアあり ・心の通ったりリハで暖かい、親切そう ・柔軟な考えを持っている ・障害だけでなく、いろんなニーズに応える ・4領域 ・難しい、広く浅く ・心がやさしい、やすらぎ ・アナログ的 ・作業療法の勉強を始めたらいかに作業療法士って何?と思う
②イメージをある程度持っている (はつきり度31-69%)	<ul style="list-style-type: none"> ・日常的な動作を通して精神的、肉体的に訓練して社会や家庭への復帰を支援する ・園芸や陶芸などを行い、身体能力の回復だけでなく、精神の安定を図る ・身体的な面だけでなく、精神的な部分もカバーできる、体と心の相互関係を考えることができる専門家 ・生きがいと一緒に見つけていく ・ボタンをつける、などという細かな繊細な作業を助ける仕事 ・なにか複雑なことを一生懸命やることにより、生活の糧を得ているようにサポート ・主に手先のリハビリをしている感じ ・回復不可能になった人への新たな手段の援助 ・折り紙と一緒に折る ・リハビリ ・工芸など ・細かな仕事 ・医療・福祉関係者以外、あまり耳にしない ・病院以外でも働いている 	<ul style="list-style-type: none"> ・ADLの支援 ・作業活動をしてリハビリ ・細かな作業を行う ・活動を共にしたり、便利な器具を作ることで不自由さを受容させて新しい生活を提案する ・患者さんに対して正面から向き合っている ・人と人の向かい合いで信頼関係が大切 ・家庭的な感じ ・大変 ・仕事の分野がいろいろあって、PT**、看護師の要求もありそう ・社会復帰の手助けなど ・領域が分かれていて何に特化すれば良いかわからない ・PT**よりも知られていないので、イメージははつきりしない ・何かものを作る 	<ul style="list-style-type: none"> ・ADL*や上肢の訓練を行う ・4領域等のADL*上の障害のある人へのリハを行う ・レクリエーション ・身体・精神面にも関わる ・場所によっては、PT**の仕事も一部は担当するので、とても忙しい ・毎日違う事をして楽しそう ・地味、幅広くてつかめない ・知名度が低く理学療法士と混同される ・4領域によって、対象者が違うから就職の時大変 ・優しい ・女性が多い ・PT**に比べてその人の個性が出せるのでは
③イメージをあまり持っていない (はつきり度0-29%)	<ul style="list-style-type: none"> ・リハビリ ・リハビリ&心理 ・手先が器用 ・生活していくうえで必要なことのリハビリ。精神的にも支える ・老人や身体障害の介護だと思う 	<ul style="list-style-type: none"> ・何かものを作る 	<ul style="list-style-type: none"> ・器用 ・物を作るのが得意 ・患者に長く関われる ・なごやか、やわらかい ・あまり職業として知られていない

備考) ADL*…基本的日常生活活動(起居・移動・歩行、車いす、食事・整容・更衣、トイレ(排泄)、入浴、コミュニケーション)
PT**…理学療法士